

## 自分だけのかまくらを作ろう

横手地区は「かまくら」と呼ばれるドーム型の雪像が有名である。20世紀半ばまでは各家庭で作られていたが、現在では横手のかまくらのほとんどが「かまくら職人」と呼ばれる専門家によって作られている。職人になるためには、まず横手観光協会の「かまくら職人見習い」プログラムに参加し、雪祭りの期間中にかまくら職人と一緒に仕事をするようになる。十分な経験を積むと、観光協会から正式なかまくら職人として認められる。しかし、正式な職人になってもならなくても、自分でかまくらを作るのは冬の醍醐味である。

## ドームの形を整える

かまくらを作るには、まず雪山の周囲に印をつけることから始まる。まず、2本の棒を1.8メートルのロープで結ぶ。片方は雪に突き刺し、もう片方は製図用コンパスのようにして、直径3.6メートルの円を描く。次に、スコップの背や自分の足を使って、円の中に雪を少しずつ積み上げる。2.5メートルの高さになったら、さらに雪を積み重ね、丸めてドーム状にして、高さ3メートルの構造にする。積み上げた雪は2〜3日で固まり、内部の作業に入る。

## 内部を切り出す

雪が固まったところで、横70センチ、縦130センチの楕円形を棒で描いて、入口の印をつける。かまくらの中で火鉢を使うときに風通しを良くするためには、入口を大きくすることが重要だ。次に、シャベルを使ってドームの壁の厚さが70cmになるまでくり抜く（壁の厚さは、内側から棒を突き出して確認できる）。シャベルの背を使って、ドームの内側と外側の壁を滑らかにする。

## 祭壇の形

伝統的には、内壁に長さ1メートル、高さ20〜30センチほどの棚を掘り、入り口に面した祭壇を作る。この棚はお供え物が置かれたもので、神道に由来するものである。次に、棚の10cm上に深さ10cmの矢印型の床を掘る。床の間の壁には、「水神様」の文字が書かれた長方形の紙が飾られている。祠の前の棚には、ロウソクや果物、酒などのお供え物などが並べられる。筵（むしろ）や小さな火鉢を持ち込み、かまくらの中で餅や甘酒を作ることもある。